

植民地朝鮮文学の東京表象

——パクテウオン 朴泰遠の「三日空き腹、春の月」をめぐる——

李 敬 恩

1. はじめに

朴泰遠（一九一〇～一九八六）は、一九一〇年一月に京城の中流家庭で生まれ、一九三三年に結成された「九人会」というモダニズム文学団体を拠点として活躍した作家である。彼は京城第一公立高等普通学校卒業後、一九三〇年に日本に渡り法政大学予科に入学する。渡日する前に、彼は既に「無名指」「最後の侮辱」「夢」「髭」「寂滅」⁽²⁾など五篇の小説作品を発表しているが、帰国後の諸作品と比較してみると、いずれも叙述技法上の未熟さが顕著に出ており、留学前の彼の文学世界が未だ習作期の状態を抜け出していなかったことを示唆している⁽³⁾。

しかし日本留学を機に、彼の文学世界は豊かな人生観や奥深い都市観を展開するようになる。それは、彼が従来の創作態度と何らかの形で決別したということを雄弁に物語るの

あり、とりもなおさず、日本での足掛け二年にわたる留学が彼の文学世界を大幅に転換させたと言えよう。実際、帰国後に彼が発表したものには、日本で味わった新しい欧米の芸術様式を鮮明に反映した、実験的かつ非伝統的な小作品が多く見られるようになる。

朴泰遠の文学世界の成立において、日本留学を重大な転機として認識することができるならば、日本留学それ自体が彼の文学世界を理解する上で非常に重要な意味を持つことも理解できよう。朴泰遠は自分の異文化体験に関する数多くの作品を著しているが、その作品からは、彼の創作手法がより一層豊かで複雑かつ多岐に渡っていることを確認することができる。帝都東京を舞台とする彼の数々の小説には、都市の深層部まで総合的な観察に取り込む主人公の様子が鮮やかに描かれており、それは当時の他の作品には見られないような鋭い視線を含んだものであったのである。

ここでは、朴泰遠における東京表象についての考察の一環として、東京を舞台とする小説群のなかで最初に発表された「三日空き腹、春の月」を取り上げたい。この作品は比較的短いものの、東京表象についての極めて有用な考察や認識を含んでいると思われる。生粋のソウルっ子であった彼が、自分の生まれ育った都市である京城ではなく、二年足らずの間滞在した東京を小説の舞台とすることで何を語ろうとしたのか。この問題を検討することによって、植民地都市の京城を舞台とする彼の代表作「小説家仇甫氏の日」や『川辺の風景』を読み直す新たな視点が得られるものと思われる。さらに、彼の文学世界における東京表象に説明を加えてみることによって、当時の植民地作家にとつての帝都東京の意味の一端も明らかになるであろう。本論は、そうした作業の第一歩である。

2. 「三日空き腹、春の月」

雑誌『新東亜』の一九三三年四月号に発表された短編小説「三日空き腹、春の月」⁴⁾(以下「三日」と略称)は、東京の浅草公園の春を舞台に、食うや食わずの生活を送っている朝鮮のルンペンが、その周辺をぶらつく姿を描いている作品である。寝床も持たず仕事にも就いていない「東京に住む、取るに足りないルンペン春三」^{オムツツ}は、題名通り、二日間もずっと飢えている。しかし主人公の春三は、ほぼ毎日浅草公園での野

宿を余儀なくされながらも、貧困に堂々と立ち向い自分の境遇を改善しようとはいささかも努力していない。小説のなかで彼が取る行動と言え、せいぜいのところ公園をぶらぶら歩きまわるか、ベンチに横たわって幸せだった過去に思いを馳せるか、空にある三日月を見上げるくらいである。

事実、丸二日間何も食べていない春三に、飯を思う以外に何かを思う余裕はなかった。彼は昨日の朝から今まで掛け値なしに三十四時間ひたすら飯のことだけを考えてきたのである。勿論、夢の中でも——しかし、夢の中にまで飯のことを持ち込んだとしても、決して腹はふくれない。(引用は朴泰遠の『聖誕祭』(東亜出版社、一九九六年)一〇〇頁、拙訳による、以下同様)

無為に日を過ごすルンペンが描写されているこの作品は、当時の批評家たちの非難的にならざるを得なかったが、例えば、この作品に関して、プロレタリア文学の代表的批評家である金八峯^{オムツツ}は、次のように批判している。

朴泰遠の作品は一言でいうと「ナンセンス」だ。彼は現実にある一切の矛盾と苦悩の根源などには見向きもしない。二日間飢えた後、「ああ——飯……。飯……。」と繰り返し口

にする失業者がせいぜい考えだすことときたら、「浅草」飲楽地区一帯に飲楽を求めてより集う人間に飯をおごつてもえられないかという思いぐらいである。しかも主人公が「いくら繰り返し考えても何の甲斐もない、その類いのことはもう頭に浮かべまいと決心して」、空腹を抱えたまま空の三日月を見上げてみて三日月も三日間飢えているように見えたとというのが結末で、このような失業労働者は現実においては皆無に等しいのが事実である。⁵⁾

金八峯が指摘しているように、確かに「三日」には、当時隆盛を極めていたプロレタリア文学によく表れたような、社会の冷たさ、資本主義の社会構造の偽善に翻弄され、追い詰められていく主人公の様子は、どこにも描写されていない。「三日」には、プロレタリア文学の陣営が夢想していた「革命の設計図」⁶⁾をあらわにするような世界は、明らかに存在していない。その上、「三日」に示されている春三の貧困の描写に、支配民族・被支配民族という二項対立的な図式の中で、植民者日本に対する被植民者の暗黙的な非難が潜在しているわけでもない。

それゆえに、「三日」に関する従来の研究は、朴泰遠が工夫を凝らして駆使した創作技法にのみ注目し、その文学的な成果を評価しようとしてきた。例えば鄭賢淑は、朴泰遠の文学

を総括的に論じた最初の研究とも言える『朴泰遠文学研究』(ソウル、国学資料院、一九九三年)において、「朴泰遠の小説は社会的矛盾を取り上げても、現実的な問題の直接的表出より、その現実を再現する美学的な方法と形式にもっと重点を置く」と分析し、この小説に用いられた斬新な小説技法に詳細な検討を加えることを中心的に行った⁷⁾。以後「三日」は、東京留学後の朴泰遠の小説に見られる創作技法の革新という面においてのみ、考察の対象とされてきた。

しかし、筆者にとつては、この作品で注目すべきことは、朴泰遠の試みた新しい創作技法より、小説の舞台として想定されている〈東京〉という都市空間の意味であると思われる。この作品を読み解いていく上で最も重要と思われるのは、朴泰遠が体験した、一九三〇年前後の東京という時空間が小説の舞台として設定されている点なのである。ここで春三における東京というテーマに改めて着目してみるならば、この小説の主題が、被植民者を差別・排除する植民者の民族の実体を徹底的に暴き出すところにあるのではなく、帝都東京で悲劇的な状況下に置かれている一個人の不幸と絶望に焦点が合わされている理由もはつきりと見えてくる。

では、その一個人である春三の不幸と絶望について見てみよう。まず「三日」に表れている主人公の春三の不幸は、彼の失職状態に起因している。

足腰は丈夫だった。

仕事がやりたかった。

しかし、彼に仕事の機会が回ってくるはずはなかった。

よって、飢え死にするしか……。

「こんなに呆気にとられるようなことはありゃしない。」

しかし、このような凄まじい状況が、この世の中には「日常茶飯事」であることを思い起こしたとき、春三はオナラもできなかった。(八三頁)

この一節には、失業者である春三が、自らの運命の惨めさを嘆く姿と共に、彼と同じ境遇にいる人々が世の中に溢れていることが示唆されている。こうした春三の認識は、「昭和恐慌」というテクスト外部の時代状況と見事に共鳴を成していると思われる⁽⁸⁾。折しも朴泰遠が来日した時の東京は、文字通り、失業者の群れや住居を失った人々が溢れる暗い時代であった。と同時に、失業が原因で、春三のように宿なし浮浪者になって街を彷徨する人も、極めて多く産み出されていた時代でもあった⁽⁹⁾。

しかしながら、こうした重苦しい空気の漂う世相のなかで、東京や大阪、特に東京の銀座で風俗産業や出版・演芸の分野に「エロ・グロ・ナンセンス」を売り物にする風潮が生まれ、

未来への夢をもてない社会状況の中で一種の不安のはけ口になった。このような都会の享樂的大衆文化は昭和六年から七年にかけて頂点を迎えるが、例えば田村穰生は、当時の都市風景を次のように要約している。

このエロ・グロ・ナンセンスという三つの性格によって彩られた「モダン生活」は、社会不安の広がる時代に、街頭での娯楽という生活の最も表層的部分に突出して現象した「変態的」な消費様式であった。そしてそれは、エロチックなサービスを売り物にしたカフェーの急激な増加、そして「エロ取締規則」を警視庁に発動させるまでに至ったレビューなどの興行娯楽のエロチック化など、一種の頹廢性を内蔵していた⁽¹⁰⁾。

右の一文は、東京において華やかな大衆消費文化が成立し、エロ・グロ・ナンセンスと称される華美で頹廢的な風俗文化が街頭で展開されていた昭和初期の有り様を明瞭に表わしている。なお田村は、昭和初期の銀座・新宿・浅草などの盛り場を、娯楽を求める東京人が寄り集う、新しい都市の大衆文化が凝縮された場所として捉えており、当時の大衆文化を考える上で、盛り場が好資料であることを明示している⁽¹¹⁾。

こうしてみると、都市東京を背景にするこの小説に「陽気

さと陰気さが入り混じっている都市」⁽¹²⁾の両義性が鮮明に浮かび上がっているのは、一九三〇年代初頭に見られる、不安と享楽が織り成す当時の社会状況に一因があると思われる。実際、朴泰遠が目あたりに見た当時の東京は、豊かさと歓楽という華やかな部分のある反面、片やそれを裏返すかのよう⁽¹³⁾に、貧困と陰鬱に満ちた都市の暗部をも有しているのである。この場合、海野弘が適切に説明したように、「光」の部分と「闇」の部分共存する都市の両面性は、一九三〇年代初頭の東京の在り方を説明する上でも有効であるに違いない。

ところで、「三日」の舞台になっている浅草の様子は、川端康成の「浅草物」と呼ばれる作品群から垣間見ることができ⁽¹⁴⁾。特に、川端と浅草との関わりが最高潮に達した時に書かれた『浅草紅団』（東京朝日新聞、一九二九年十二月〜一九三〇年二月）には、現在進行形を用いる現地レポートという形式で、浅草の表層が直截に語られている。なおその活気ある表層的世界には、片山倫太郎が明確に指摘しているように、「楽天さを否めない川端」の世界観が鮮やかに投影されている⁽¹⁵⁾。前田愛が『浅草紅団』の舞台である浅草を「陽気なステージ」を持つ「劇場」として捉えたもの⁽¹⁶⁾、作品に点綴されている華やかさに加えて、川端の意識が「浅草の歓楽と一定の蜜月状態であった」⁽¹⁷⁾ことを雄弁に物語っている。この作品は、朴泰遠が体験したであろう浅草を、ほぼ同じ時期に描き留めている

るといふ点において非常に参考となるものであるが、かと言って、川端の垣間見た浅草の世界が朴泰遠の描いた浅草と同一の趣きを帯びているとは思えない。

では、朴泰遠の「三日」に描写されている浅草は、どのような様相を呈しているのだろうか。まず、この作品の舞台である浅草を解き明かす鍵は、春三の貧困が、他方で存在する物質的繁栄と対照をなしながら色濃く影を落としている点にある。こうした春三の貧困の問題は、彼が「ああ——飯……。飯……。」という呟きを五回も繰り返す行動に端的に反映されている。その呟きの前後に綿密に目を配ってみるならば、そこに彼の貧困や苦難のイメージを一段と際立たせるような対応物が交錯していることが分かる。この一連のコントラストを表にすると、次のようになる。

「ああ——飯……。飯……。」	対応物
一回目	東武電車の「日光」宣伝ポスター、飛鳥山の桜
二回目	可愛い御酌、食べ物
三回目	雷門の前の群衆の華やかな顔立ち、露店の食べ物の匂い
四回目	カジノ・フォーリー、お酒、女、娯楽
五回目	京城での思い出

要するに、「三日」における朴泰遠の（東京）という都市空間の中には、貧困と物質的豊饒・享樂的消費文化の対照がくつきりと存在し、各々が小説に特別の意味付けを施していると言い得る。まず第一回目の「ああ——飯……飯……。」が出てくる小説の冒頭部分を見てみよう。

素寒貧な人に冬はあっても、空きっ腹の人に春はなかった。

というわけで、飛鳥山の桜が満開だという記事が毎日のように新聞の紙面を賑わせていても、「日光——当日往復」の宣伝ポスターが「東武電車」に華々しく貼り出されていても、それらは我々が春三が一切気にする事柄ではなかった。（八二頁）

ここからは小説の主人公の春三が身を置いている都市東京の趣きを窺い知ることができる。この文章は、きらびやかな都市東京から疎外され、孤立している貧しい朝鮮のルンペンの姿を鮮明に浮かび上がらせているのである。このように春三の貧困を端的に表わす「ああ——飯……飯……。」という言葉は、第四回目にいたるまでは、東京にある何かとの対照によって喚起されている。では、ここで第四回目を見てみよう。

その時、向こうの水族館の二階のカジノ・フォーリーからジャズが聞こえてきた。「影を慕いて」とか何とかという音楽だ。春三はその音によって、ここが浅草公園だということ改めて強烈に思い知らされ、それと共に、ここに音楽を求めて寄り集う人々が、一日に十万人は優に越えるだろうと誰かに聞いたことを思い出して、力なくフウーと息を吹き出した。

一体あの群衆は、彼ら自身が酒と女と娯樂を求めぬのに夢中になっているその時、同じ公園の中に六食も欠いた男がいることを知っているのだろうか。それとも、知っているくせに知らんぷりするのか。もし彼らが人間本来の暖かい心を持っているならば、自分に一食の飯を食わせてくれるくらいのことは……。

「ああ——飯……飯……。」（八六頁）

ここには、餓死寸前にまで追いやられている春三が、歓樂に溢れる盛り場の浅草からも、そこに群れ集う群衆からも疎外されていることが語られている。その上、水族館の余興として浅草に開場したレビュー団の「カジノ・フォーリー」からも、そこから響き渡る「影を慕いて」という当時の流行歌の音からも、春三は浮き上がっているのである。結局のところ、浅草に集まった夥しい数の群衆は、春三に嫌悪と反感に

近い感情を催させる。それは、春三がいささか非難がましい視線で、浅草の群衆の有り様を観察していることにも容易に確認されよう。なおその視線は、浅草の群衆の感性を共有できずにいる春三の違和感をも微妙に示唆している。

以上見てきたように、この小説で「ああ——飯……。飯……。飯……。」という言葉が現われる時は、この言葉を発する春三の貧困と、華やかな都市とが必ず対照させられている。しかし第五回目になると、現在の春三の苦境を際立たせているのが、都市東京の風景から、急に京城の思い出へと変わる。いずれにせよ、飢えに苦しむ春三が、それを凌ぐためという名目で、かつて京城で母と過ごした幸せな時間を思い浮べているのは、すこぶる象徴的である。と言うのも、春三が思い出す京城での満腹の記憶は、行くことも帰ることも出来ない疎外者の宙ぶらりん状態をはっきりと示しているからである。

春三はその時、母がやっと「蒸し餅」を買ってきてくれて、自分がそれを飽きるほど食べたことを思い出して、そして深いため息をついた。名前も姓も知らないその酔っぱらいは、春三が焼き鳥を好まないからといって、決して今川焼か他のものを買ってきてくれたりはしないだろう。

二日間飢えた腹を抱え込んで、空を仰いで見たら、まさに自分の頭の真上に三日月が——「三日間飢えた春の月」が

かかっていた。春三は生あくびをした。(八九頁)

右の引用文は小説の末尾の部分に当たり、ここで春三は、母が自分の好物である餅を買ってきてくれた京城での過去の思いに深く浸っていたために、現在東京で、ある酔っぱらいが自分に差し出した焼き鳥を受け取る機会を逃してしまふ。結局、物語は、春三が空に漂っている三日月を見上げ、生あくびをする行為を見せる地点で終結する。結末で見られるこうした春三の行為には、故郷を離れ、寄る辺ない放浪者の漂泊感がよく表われている。しかしここで注目すべきは、春三の行為が、都市の底辺で生きていく人々を代弁する都市観察者の行動というより、故郷を離れて、ただ都市の街頭に佇んでいる孤独なアウトサイダーのそれとしてしか捉えられないという点である。

これまでの分析を再論してみると、次のようである。まず朴泰遠が「浅草」を、都市の諸相が重層的に交錯するトポスとして設定したのは、極めて鋭い洞察であった。「三日」の世界には、この浅草を媒介として、東京の華やかさと、それと隣り合わせになっている翳りが、春三の「ああ——飯……。飯……。飯……。」という言葉が表象する〈貧困〉と、これと対照される様々な形象の挿入が見事に対応している。しかし、ここで見逃してはならないのは、この作品に、東京の両面的属性の描写に

加えて、京城での記憶を思い起こしている「植民地人としての春三」というもう一つの立脚点が設定されている点である。自らを植民地人として自覚した以上、春三は当時の植民地人の殆んどが東京に対して抱いていた「恋しさと憎しき」¹⁸という両面的感情から免れ得ない。

今までの考察で明らかにされたように、「東京の最先端風俗を示した場所・浅草の磁場にひかれ、その磁場が産み出したような『浅草紅団』において」¹⁹都市文化への楽天的な夢を語った川端とは違って、朴泰遠は「三日」において、光と闇に包まれている混沌とした「東京」という都市空間の姿を的確に写し取った。無論、この東京の風景の発見に、梶井基次郎の「冬の日」に描かれている主人公のように、「都市の中心から疎外されているという孤独によって、都市を見えるものとする自由を獲得した」春三という都市生活者が横たわっていることは疑いの余地がない²⁰。

しかし、「モダン都市の風景を発見するために生み出されたボヘミアンという表現者」²¹を体現する人物であった春三は、物語の最後の場面に至っては、単なる望郷者の側面が強くなる。つまり、母がいる安らかな京城の世界を思い起こすことよって、周囲の社会から孤立して「光」と「闇」が彩る東京を注意深く観察してきた春三の感性は、宙づりにされたのである。それゆえに、この地点で、東京を理解し、堪能し、肉

体化することが出来る都市観察者としての春三の可能性は、完膚無きまでに閉ざされてしまった。そこで、東京を小説の中に盛り込もうとした朴泰遠の最初の試みであるこの作品は、植民地人としての感受性の関与によって挫折させられたと言える。

3. 結びにかえて

昭和初期の切迫した世相を背景に、一人のルンペンのごん底生活を描いているこの作品は、当時の東京の社会状況とつき合わせてみると一層よく理解される。と言うのも、「三日」には当時の時代状況がきめ細かく投影されているからである。主人公の春三は、自分の貧困と浅草の歓楽を対比させ、東京の面面的な属性を明確に捉えたが、作品の結末にいたっては、単なる望郷者の側面が強くなる。これは、東京という都市空間を都市観察者の位置で眺めることを春三が放棄したことを示唆する。従って、作品の結末の春三からは、鋭い観察力を喪失して浮游する根無し草の姿のみが見受けられるのである。こうした結末の表れは、都市東京それ自体が有している面性が、植民地人が帝都東京に対して抱く面面的感情に切り替えられたことよって生じたもののように思われる。

本論では、朴泰遠の小説「三日」に表れている東京表象に焦点を絞って考察を行ってみた。しかし「三日」以後の作品

における東京表象についても十分な検討が行わなければならぬ。またそうした一連の研究によって、朴泰遠の東京表象がより一層明瞭になるに違いない。ひいては、植民地知識人にとって〈東京〉はどのような象徴体系であったのかも明らかにしておくのであろう。

註

- (1) 九人会は一九三三年八月十五日にモダニズム文学者の九人をメンバーとして発足した団体である。
- (2) 「無名指」と「最後の侮辱」は一九二九年十一月発表。その他は一九三〇年一月から三月にかけて創作されているが、「寂滅」(『東亜日報』一九三〇年二月五日～三月一日)以外の作品「髭」と「夢」は朴泰遠が日本に滞在していた時に発表された。
- (3) これについては、金尚泰の『朴泰遠』(ソウル、建国大学校出版部、一九九四年)を参照されたい。
- (4) 原題は「사흘품을다」。なお同作品の題名が、『世界文学大事典』(集英社、一九九七年)には「三日も空き腹だった春の月」となっている。
- (5) 金八峯「一九三三年度短篇創作七十八篇」(『新東亜』、ソウル、一九三三年十一月)
- (6) 前田愛「芥川と浅草」(『都市空間のなかの文学』所収、筑摩書房、一九八九年)二九九頁。
- (7) 「三日」における新しい創作方法として、鄭賢淑はまず第一に、二つの空間が同時に処理される「空間化手法」、第二に過去と現在が交差する「二重露出」、第三に改行、文章符号、文字の分解などレトリック上の問題などを挙げている。『朴泰遠文学研究』(ソウル、国学資料院、一九九三年)一一六頁。
- (8) 「昭和恐慌」とは、世界大恐慌の打撃を受けて、未曾有の恐慌状態に陥った日本の経済を示す言葉である。速藤憲昭編『流行歌と映画でみる昭和時代Ⅰ』(国書刊行会、一九八六年)三一頁。
- (9) 大恐慌の年、一九二九年に作られた小津安二郎監督の映画『大学は出たけれど』は、不況のためになかなか就職が出来ない若者の就職苦労話で、そのタイトルは不況時代を象徴する流行語となった。川本三郎『映画の昭和雑貨店』(小学館、一九九九年)五五頁。
- (10) 石川弘義編『娯楽の戦前史』(東京書籍、一九八一年)一九〇頁。
- (11) 吉見俊哉は『都市のドラマトゥルギー』(弘文堂、一九八七年)において、一九二〇年代の浅草が銀座とは顕著に対照的な〈浅草的なるもの〉を持つ盛り場であったと解釈し、浅草が江戸以来の伝統を残しながら、異質な要素を融合させた、ひとと纏まりの盛り場の世界を現出していたという結論を導いて

いる。

- (12) チャールズ・スクラッグズ『黒人文学と見えない都市』（松本昇他訳、彩流社、一九九七年）六七頁。
- (13) 海野弘の「都市のアンダーワールド」（『現代詩手帳』第三八巻十号、一九九五年十月、二二頁）を参照のこと。
- (14) 川端康成の浅草物には次のような作品がある。『浅草紅団』（一九二九）、『浅草日記』（一九三二）、『浅草姉妹』（一九三二）、『浅草の九官鳥』（一九三三）、『浅草祭』（一九三四）。『川端康成全集』第四卷（新潮社、一九八一年）による。
- (15) 片山倫太郎『浅草紅団』論（『国語と国文学』第三六巻十五号、一九九二年三月）六三頁。
- (16) 前田愛「劇場としての浅草」（『都市空間のなかの文学』所収）二八八頁。
- (17) 片山倫太郎、前掲書、五八頁。
- (18) 大村益夫編『近代朝鮮文学における日本との関連様相』（緑陰書房、一九九八年）九二頁。
- (19) 平山三男「川端康成の東京」（『国文学解釈と教材の研究』第三六巻十五号、一九九一年十二月）一九〇頁。
- (20) 海野弘「梶井基次郎のモダン都市」（『国文学解釈と教材の研究』第三三巻十四号、一九八八年十二月）四四頁。
- (21) 海野、同右、四四頁。